

【ギャラリーの庭作り】

5 月のある土曜日、会員の村上信介さんが軽トラの荷台に刈払機や刈り込み用の植木鋏を積み、焼酎のお土産まで持参して、久しぶりに熊本からやって来ました。村上さんは庭師さんです。ギャラリーの庭を造ってくれた京都の庭師浅田さんの永年のお友達です。その昔、二人はちょっと有名な親方の下で瀬戸内寂聴さんの「寂庵」の庭を作ったこともありました。

ギャラリー玄関口のサツキの植え込みに猪が掘り起こした一角があります。これが気になって仕方なかったのですが、そこへ折良くサツキを下さるという方が現れました。佐渡裕さんと育徳館オケの第九公演の折、地元みやこ町の合唱指導をして頂いた岩本先生のお宅に成長しすぎたサツキがあるというのです。これ幸いととびついて移植を試みましたが私の手に負えません。思案していたところに村上さんが現れてくれたのです。

現地に着くなり、村上さんは刈り込み鋏でバサバサと樹形を整え、根を切り揃えて掘り起こすと、1 本 70 キロはあろうかという移植用の樹塊が次々に出来上がります。掘り起こした 8 本の皐月の樹塊を軽トラに積み込んでギャラリーに持ち帰って植え込みましたら、庭の景観がもとの姿に戻りました。まさしくプロの技でした。

ギャラリーの庭は原田脩の絵の雰囲気に合わせて浅田さんに設計してもらい、皆で力を合わせて作ったものです。この地は背後の硯山の穏やかな稜線と水鳥の遊ぶ溜め池のたたずまいという、借景に恵まれています。この雰囲気を活かすために、庭のしつらえは最小限にとどめることが浅田さんの作



庭方針でした。作庭のポイントは 2 つの大きな石でした。大きい方は 20 トンに近くてどっしりしたもの、もう一つ高さが 2 メートルを超す大きさのため、運び入れるのに苦労しました。熊本県球磨川の石だそうで、古老に言わせると球磨川は暴れ川なので多くの人命が川で失われているから、そのままでは庭石に用いない方が良くとのこと。大きな石の佇まいをじっと見ていると古老の話が真実味を帯びてきました。そこで、原田脩の友人で



徳島県阿波一宮の大麻比古神社の神官永井干城さんにお出で頂き、神式で鎮めて頂くことにしました。永井さんは原田脩の小倉高校16期の同級生で、しかも永井さんの2歳年下の実弟三井喜代治さんはお兄さんと原田脩の交流に影響されて美術部に入部し後に部長を務めてくれました。ギャラリーの完成直前に心臓麻痺のため亡くなってしまったのはかえすがえすも残念でした。庭師の浅田



さんは美術部の仲間三井さんの親友でした。浅田さんは、三井さんへの供養と原田脩の瀧の絵に対するオマージュの気持から丈の高い石を那智の瀧に見立て、おかめ笹で水の流れを表現してくれました。（この辺りの経緯は妻植田幸子の書いた『原田脩記念ギャラリー稲童建立記』に詳しく記載されています）

永井さんの祝詞のおかげでしょうか、この大きな二つの石は、その後庭に様々なモノを呼び入れてくれました。ギャラリー玄関前の石組みと石灯籠に始まって、サルスベリの巨木、槇の成木3本、石造の井筒、孫文ゆかりの梅の木など、ギャラリーの庭になくてはならない物たちです。亡くなった私の同級生小林君が取り寄せてくれた秋田角館の枝垂れ桜と、茶の木も石の供養のおかげで元気に育っています。茶の木畑は育徳館オケが佐渡さんの歓迎演奏をする際に演奏場確保のため山際に移植し、芝生に張り替えました。茶の木は元気よく育ち、今年も茶摘みをして手もみ茶を作る事が出来ました。芝生にしたはずの茶畑はこの時期、雑草に負けて草原状態になり、芝刈り機ならぬ乗用草刈り機が活躍しています。農業班のおかげで何とか美術館らしい庭が維持できています。余談ですが、池の畔に船小屋を作り、柳を植えたのは私の遊びです。

【脩の瀧】

原田脩の命日3月24日は「瀧月忌」と称して仲間が集まり、句会に興じる日です。今年の兼題は花と春。例によって句会か飲み会か良く分からない状態になりました。今年の日賞、地賞は同点で賞を分け合いました。受賞作品は次の2点です。

くっくうと夜の鳩鳴くおぼろかな	翠
大蒜の一欠片（ひとかけ）植えて花を待つ	二一六

「瀧月忌」から始まる新たな展示をどうするかが例年の課題でしたが、今年は「脩の瀧」でいくことにしました。若い頃原田脩に那智の瀧の存在を教えた大麻比古神社の永井さんが昨年末、お亡くなりになったからです。永井さんはかつて「那智の瀧余聞」と題する手記をギャラリーに寄せてくださいました。

それによると、2人の那智の瀧との出会いの発端は土門拳の撮影した「那智の瀧カレンダー」だそうで、土門拳の写真集「古寺巡礼」や「筑豊の子どもたち」に魅せられた若い2人が土門拳について

語り合うなかで那智の瀧が話題になったとのことでした。やがて原田は画家の卵として古寺巡りを始め、永井さんは大学4年生としてワンダーフォーゲル部に属して漂白の旅を続けるようになり、昭和42年の春、那智の瀧に行こうとした永井さんが、紀三井寺駅のプラットフォームに立っている原田に偶然出会ったそうです。その時が原田脩の那智の瀧との運命的な出会いとなりました。原田はその時の那智の瀧との出会いを詩に書いています。

わたしはゆっくりと かんどうのおさを
気にしながら 石段をおりていった
杉の木立がおおいかぶさって 何百年来の杉だろう
その一本一本を しっとりとした きりが やさしくつつんで

たきの流れを みあげると ただなにも云えない
それだけで たきを みたかいがありました
たきをかくくるしみと むつかしさが しみじみと わかりました

なちのたき
なちのたき

ほっそりとした 女性的な ひびきのする
たきのように 思っていた
私のかんがえは 一瞬に押しつぶされました

那智の瀧との出会いによって原田脩の全国の瀧巡りが始まったのです。東北の最上川に懸かる白糸の瀧、蔵王を水源とする秋保大滝、男体山をバックに中禅寺湖から落ちる華厳の滝、信州の山奥にある二筋の権現の瀧と不動の瀧を擁する米子大瀑布、いずれも信仰の対象となっている名瀑です。これらの日本を代表する瀧を廻って作品に仕上げながらも、やはり最後は那智の瀧に帰って行きます。その那智の瀧の最後に行き着いた作品が全ての色彩を消し去った真っ白な瀧でした。

第十九期常設展

オサムの瀧

ながい たけし
永井 干城 追悼
2025年 4月



原田脩記念ギャラリー稲童

〒824-002 福岡県行橋市大字稲童3202番
電話/ファクス 0930-24-5611
<http://www.gallery-inadou.org>
【開館日】土・日・夜日【開館時間】午前10時30分～午後5時（入金16時30分）
【入館料】協力会員 無料 ・一般 300円 ・高校生以下 無料

【ギャラリーは開館15年を迎えました】

ギャラリー稲童と一緒に作り上げ、秘密基地として一緒に遊んできた「へんなおっちゃん、おばちゃん」たちは今や「変な爺ちゃん婆ちゃん」になってきました。濱田副館長はこの4月に80歳に到達、毎週博多から自転車で通ってくる超人廣中シェフも79歳になりました。しかし、本人達是一向に年齢を気にかけません。足はよろける、目はかすむ、髪薄くなる、腰痛むと老化現象を抱えながら老

いを楽しんでいます。この「変な爺ちゃん婆ちゃん」達は実はすごい人生経験や特技の持ち主なのです。その中の一人が山崎先生。地元北九州大学のエライ先生でした。母校北九州大学の設立から現在に至るまでの歴史を面白おかしく、しかも真面目に書いた『北九州大学物語』を上梓して、この本が評判になっています。



また園芸に凝ってギャラリーのブルーベリー栽培の助っ人を楽しんでいる村上雅健さんは南極観測隊のドクターとして南極越冬の経験を持っています。シェフのヒロミさんは何と砒素の専門家です。簡易砒素検知装置を発明し、発展途上国での砒素検知に役立って、その世界では「ユーメイジン」だそうです。さらに、詩人もいます。岩手県出身の桑島さんは宮沢賢治に惹かれ詩人になってしまいました。こんなすごい人達を放っておく手はありません。開館 15 周年の記念講演の講師として登場していただければ面白い話が聞けますし講師料の必要がありません（笑）。平身低頭して講演していただくのは館主の仕事です。講演予定が決まり次第ホームページでお知らせ致します。うまくいくかどうか、お楽しみに。

【抹茶とワイン】

土壁作りに失敗して暫く放置していた茶小屋の完成に向けた作業を開始しました。ギャラリーに隣接した畑の底から出てきた粘土で細川家 19 代目細川護光さんが作ってくれた抹茶茶碗の茶室デビューをこれ以上送らせるわけにはいきません。仕事の相棒は例によって宮崎源ちゃんにお願いしました。まったく「困ったときの源ちゃん頼み」です。まず小屋の周囲に縁側を廻らせて、障子と雨戸を立て付けて雨露を凌がなければなりません。土壁は非常に難しいので漆喰もありかなと考えています。床柱には宮若市の山中から切り出してきた赤松がありますし、旧家の取り壊しの折にもらってきた黒檀の床框もあります。何とか年内に完成させて正月には初釜をめざします。ただし、仲間の「変な爺ちゃん婆ちゃん」達の中に正式なお点前が出来る人がいるかどうか、それが問題です。

これまでも館主便りでお知らせしましたが、自家製野生葡萄ワイン製造に取り組んでいます。1627 年に当時の小倉城主だった細川家 3 代目細川忠利公が、この地豊前国仲津郡で野生の葡萄（当地ではガラミと称します。学名はエビヅル）からワインを作ったと、永青文庫に書いてあることが 10 数年前に発見されました。文献上はこれが日本最初のワインだそうです。これに刺激されて自生しているガラミを挿し木して育て始めたのが 2019 年です。昨年は 20 キロの野生葡萄から 12 本の自家製ワインが出来上がりました。再来年は日本最古のワイン醸造開始から 400 年目にあたります。これを記念して細川家歴代の殿様をお祀りしている水前寺公園内の泉神社（宮司は細川護光さんです）にガラミワインを奉納したいと考えています。その時は試験ワインでなくワイナリーに頼んで本格的なワインに仕上げます。そのためのガラミ収穫倍増計画を作り、本格的な野ブドウ栽培に取り組んでいます。目標は私の体重 65 キログラム。さてどうなりますことやら。